

龍谷大学世界仏教文化研究センター 学術講演会

講演名	華嚴の世界—『華嚴経』と南方マンダラー
開催日時	2017年1月22日(日) 13:30~16:00
場所	龍谷大学 響都ホール 校友会館
イントロダクション	唐澤太輔氏(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員、本講演会コーディネーター)
講演者	中沢新一氏(明治大学野生の科学研究所所長)
鼎談者	中沢新一氏×唐澤太輔氏×野呂靖氏(龍谷大学文学部専任講師)
総合司会	亀山隆彦氏(龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
共催	明治大学野生の科学研究所、龍谷大学仏教文化研究所(大正新脩大蔵経の学術用語に関する研究)、龍谷学会
協力	龍谷大学アジア仏教文化研究センター(BARC)
参加人数	350人

イントロダクション：南方熊楠とは何者か

講演者：唐澤太輔氏(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)

時間：13:35~13:55

【講演のポイント】

中沢新一氏の講演に先立ち、本講演会の企画者・コーディネーターである唐澤太輔氏より、南方熊楠の人生が通観された。

【講演の概要】

南方熊楠の業績は多岐に渡る。科学雑誌『ネイチャー』へ50本もの論考を寄稿したり、粘菌という非常に不可思議な生命体を研究したり、神社合祀反対運動を行ったり、「十二支考」など民俗学に関する論考を夥しいほど書き残したりしている。

熊楠は、少年時代、『和漢三才図絵』という江戸時代の大本事典を、友達の家から借り出し、読み筆写している。奇行の多い子どもで、周りからは「てんぎゃん(天狗さん)」「反芻」などというあだ名が付けられていた。大学予備門(現在の東京大学教養学部)に入学するも、酷い頭痛と落第を機に退学。アメリカへ行くことを決意する。

熊楠は、パシフィック・ビジネス・カレッジ、ミシガン州立農学校を建て続けにドロップアウトし、キューバへと向かう。そこでサーカス団と交流を深めながら、生物採集などを行った。

アメリカでは彼の知は満たされず、今度は、イギリスへと向かう。熊楠は、ロンドンの大英博物館円形書籍室で、一切智(Doctor Universal)を目指し、古今東西の書籍を写した。「学問と決死すべし」と書かれた当時の日記から、彼の固い決意が見えてくる。26歳の時、『ネイチャー』に「東洋の星座」が掲載され、その後も次々と英語論文を発表していくことになる。

しかし、1897年11月、大英博物館内で暴力事件を起こし、これがきっかけとなり、熊楠は同館を追放される。また経済的にも困窮し、日本へ帰ることを余儀なくされる。帰国後、熊楠は那智山へ向かう。この頃、熊楠はしばしば幽霊を見、体外離脱なども経験している。このような精神的危機状況の中「南方マンダラ」は記された。

約三年間の那智山滞在の後、熊楠は、和歌山県田辺市へと移り住む。その頃、全国的に、明治政府による「神社合祀政策」が行われていた。熊楠は、この政策に敢然と立ち向かった。この時熊楠は「エコロジー」という言葉を使用した。

熊楠と粘菌研究において協力関係にあった、グルエルマ・リスターは、熊楠が標本に記載する文章には「詩的情熱」が込められていたという。それは、ロゴスの的に整然とした順序に則った在り方ではなく、情熱的で直観的な在り方のことである。

国文学者の益田勝美は、熊楠の民俗学上の仕事を「悲しみを覚えさせるような知識の饗宴」と評した。確かに、「十二支考」などは、熊楠による曼陀羅のような「腹稿」がそのまま表された感は否めない。自由闊達とも言えるし、中途半端だとも言える。しかし、これが南方熊楠なのである。

昭和天皇は、熊楠と同じく、粘菌の不思議さに引かれ研究していた。そして、1929年6月1日、田辺湾沖での昭和天皇への御進講が行われた。熊楠は粘菌の標本をキャラメルボール箱に入れて献上した。昭和天皇は、このエピソードについて、後年「それでいいじゃないか」と懐かしがったという。

「天井に紫の花が咲いている」と言い残し、熊楠は、1941年12月29日に亡くなった。

何となれば、大日に帰して、無尽無究の大宇宙の大宇宙のまだ大宇宙を包蔵する大宇宙を、たとえば顕微鏡一台買うてだに一生見て楽しむところ尽きず、そのごとく楽しむところ尽きざればなり。

(1903年7月18日付土宜法龍宛書簡)

熊楠は、その生涯をかけて、粘菌を観察し続けた。この詩のような言葉からは、熊楠は、顕微鏡から見える美しい極小の世界に、大宇宙を見ていた様子がよく分かる。

講演：レンマ科学の創造にむけて—発端としての南方熊楠—

講演者：中沢新一氏(明治大学野生の科学研究所所長)

時間：14:00～15:20

【講演のポイント】

思想家・人類学者の中沢新一氏による講演。主に、以下の項目の講演がなされた。

- 1, 現代の「ノヴム・オルガヌム」としてのレンマ科学(A Lemma Science)
- 2, 南方熊楠は新しい論理機関(ノヴム・オルガヌム)を備えた「新しい学」が創造されなければならないと考えていた。
- 3, 「新しい学」の土台に据えられるのは「縁起の論理」である。
- 4, 「ロゴス」と「レンマ」
- 5, 「縁起の論理」としての「レンマ」
- 6, 四種法界
- 7, 「四種法界」と南方熊楠「五種不思議」の対応

【講演の概要】

講演の詳細は、改めて公開予定。

鼎談

鼎談者：中沢新一氏×唐澤太輔氏×野呂靖氏(龍谷大学文学部専任講師)

司会：亀山隆彦(龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント)

時間：15:30～15:55

【鼎談の概要】

鼎談では、野呂靖氏を招き、主に「明恵」「通路」「夢」「瞑想」などをキーワードに、議論を行った。

はじめに、中沢・唐澤両氏の講演を受けて、野呂氏より日本の華嚴思想の特徴についてコメントがあった。野呂氏によると、日本の仏教の歴史の中で華嚴思想が表に出てくることはあまりなかったが、日本仏教を代表する思想家である最澄や空海の発想のベースには華嚴の縁起・法界観があり、それは熊楠に至るまで、日本の仏教思想の通奏低音として脈々と受け継がれてきたという。また野呂氏は、凝然ら、日本の華嚴思想家にとって「通路」という概念が非常に重要であったことを指摘した。

次に、唐澤氏によって、独自の南方マンダラの解釈図の解説が行われた。唐澤氏の見解によると、熊楠の言う「大不思議」は、全てが生じ全てが帰還する根源的な場ということである。そして、そこから生じてきた「心」と「物」が交わる所、これが「事」となる。唐澤氏は、「南方マンダラ」の説明で熊楠のいう「理不思議」こそ、「通路」なのではないかと言う。つまり、現実世界と根源的な場をつなぐ「通路」と、事物と事物をつなぐ「通路」、この、一見対立するように見える両極をつなぎつつ混ぜ合わせる「場」を熊楠はとらえていたのではないかということである。唐澤氏は、熊楠は、華嚴思想における「理事無礙法界」と「事事無礙法界」を一言で「理不思議」とカスタマイズして言っていたのではないかと述べた。

以上の野呂・唐澤両氏のコメントを受け、中沢氏は、華嚴と熊楠の思想関係について、さらに次のような指摘を行った。中沢氏はまず、華嚴宗第三祖・法蔵の法界に関する考え方は「生命の進化実相」に対応しているのではないかと、そして、唐澤氏の言う「大不思議が理法界ではないか」という点には疑問が残るとした。さらに、法蔵の言う「理」と熊楠の言う「理」は異なるのではないかという意見も述べた。中沢氏によると、20世紀に入り、大きな進歩を遂げた量子力学の根本的な考え方は、華嚴の事事無礙法界のそれに近いという。熊楠は、現代科学に見られるそのような点まで実は見越していたかもしれない。

続いて野呂氏は、鎌倉時代の華嚴僧・明恵高弁は「夢」に非常に強い関心があり、それが彼の瞑想修行と深く結びついていた可能性を示唆した。野呂氏は、明恵は瞑想のように、意図的に夢を見ていたのではないかという意見を述べた。

唐澤氏は、熊楠も明恵と同じく「夢」に非常に関心があったことを指摘した。また熊楠は、顕微鏡を使って粘菌を見るとき、一種の瞑想状態にあったのではないかと付け加えた。

夢と瞑想に関する両氏の話を受け、中沢氏はさらに、裸眼立体視を行った時の、起き上がった絵を見たときの快感と、顕微鏡を見ているときの恍惚感は似ているのではないかと述べた。同じく中沢氏によると、顕微鏡であれほど恍惚としている文章を書いているのは、熊楠くらいではないかと言う。

さらに中沢氏は、龍谷大学から、華嚴の新しいムーヴメントを起さすべきだと言う。物と心の科学を考える際に、華嚴は欠かすことができない重要なものだと述べられた。

詳細は、改めて公開予定。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター唐澤太輔・亀山隆彦